

法隆寺と正倉院の尺八の音律

明土真也

本論では、法隆寺の尺八と正倉院の尺八 8 管の管長と音律を精微に検討し、これらの製造国等を考察した。

従来、尺八は、唐の呂才による発明とされていた。そのため、正倉院の尺八には唐小尺に適合しないものがあるにも関わらず、法隆寺の尺八も正倉院の尺八も、唐小尺に準じるとみなされていた。

これに対し、本論では、『旧唐書』と『新唐書』、および音律の残差平方和に基づき、尺八を呂才以前のものとして以降のものに分類し、呂才以前のは、1 尺 8 寸の管長を有し、音律が不正確であること、呂才以降のものは、12 律管に対応した 12 種類の管長と、三分損益法に準じた正確な音律を有することを明らかにした。そして、これにより、法隆寺の尺八は呂才以前のものであり、正倉院の尺八は呂才以降のものであることを示した。

また、『隋書』および管長の理論値に対する残差の 95%信頼区間から、法隆寺の尺八と正倉院の尺八の管長は、唐小尺に準じるものと魏杜夔尺に準じるものに分類できることも明らかにした。そして、百済の義慈王から贈られた尺八 4 管の管長が全て魏杜夔尺に準じているため、百済では魏杜夔尺を用いていたと判断した。